

牛久：学校周辺に見る自然

第10号 ひたち野うしく小

2012年5月19日発行

＜ 植物のすがた（春） ～プール入口まで歩いてみたら・・・ ＞

4/24, 26, 5/1、ひたち野うしく小3年生との植物観察。皆さんとの授業の後、プール入口まで足を延ばしてみました。



葉をもむと、キュウリのようなにおいがする、キュウリグサ。「わーッ、本当に、キュウリのにおいだ〜ッ！」

ここにも、**キュウリグサ**がたくさんありました（第8号参考）。それで、葉の匂い^{におい}をかいでいる写真があったことを思い出し、ここに載^のせることにしました。「わーッ、本当に、キュウリのにおいだ〜ッ！」と、びっくりしていましたね。



ノゲシ（左）とオニノゲシ（右）。見分けは、葉のつけ根のちがいに注目！

ノゲシや、ヨーロッパ原産の**オニノゲシ**もたくさんありました。名前に「ゲシ」とつきますが、花を見て分かるように、ケシ科の仲間ではなく、タンポポなどと同じキク科の仲間です。オニノゲシの方が葉のトゲが痛そうですが、一番簡単^{かんたん}な見分けは、葉のつき方。ノゲシは葉のつけ根がはり出して^{くき}茎を抱きま^だきますが、オニノゲシでは、葉のつけ根が丸く耳形になって茎を抱きます。校庭では、左の写真のように、ロゼット（23年度 68, 72, 73号参考）から茎が^{のび}伸び出したところに花をつけているものも見つけました。



← ロゼットから伸び始めた茎に、花をつけていたオニノゲシ。



オランダミミナグサ。虫めがねで見ると、花がハコベの仲間であることや、腺毛で粘つくことなどが分かる。

次は、ヨーロッパ原産のオランダミミナグサ。小さな花で分かりにくいですが、虫めがねで見ると、ハコベの仲間であることが分かります（23年度6号参考）。さわると粘つくのは、これも虫めがねで拡大すると分かりますが、粘液を出す毛（腺毛：せんもう）がたくさん生えているからなのですね。



こちらは、北アメリカ原産のアメリカフウロ。日本のゲンノショウコなどに近い仲間です。畑のように栄養条件のよい土地では、放っておくと茂みのように大きく広がってしまいます。



↑ アメリカフウロ。右は放棄畑で茂っていたもの。



左はまるで園芸植物のように鮮やかですが、栽培されることもあるケシ科のナガミヒナゲシです。果実がやや細長いのでこの名がありますが、成熟するとまさに「ケシ粒」といった種子がぎっしりつまります。このたくさんの種子で、市街地でも道端でも、いろいろな所に増えているように思います。地中海地方原産で、乾燥して土があまりないような場所でも、小型ながら花を咲かせ果実を实らせているのを見ます。

←各地で増えている、地中海地方原産のナガミヒナゲシ。



最後に、アブラナ科のスカシタゴボウ（左）とイネ科のスズメノテッポウ（右）。スカシタゴボウの花は小さいですが、やはり4枚の花弁が十文字についていて、アブラナと似たような果実ができています。スズメノテッポウは、雄しべの葯（やく）が白から黄褐色に変わっていくので、写真から、上から下に向かって咲いていくことが分かります。どちらも、日本の在来種です。

【理科支援員：宮内】

スカシタゴボウ(左)とスズメノテッポウ(右)。